



予防接種



【移植後予防接種の特徴】

- 造血幹細胞移植後は、幼少時の感染、あるいは予防接種を受けてできた抗体が、徐々に減少することが多いため、ワクチンの再接種をお勧めしています。
- 移植後の予防接種は、**任意接種**です。
 - 接種の費用は**自費**となります。
(年齢や自治体によっては助成が受けられる場合があります)
 - 接種による健康被害**は、定期接種の場合の予防接種法に基づく救済とは異なり、**独立行政法人医薬品医療機器総合機構による被害救済**の対象となります。

【移植後に接種するワクチンについて】

大きく分けて、不活化ワクチンと弱毒生ワクチンの2種類があります。

種類	ワクチンの違い	接種時期(条件)
不活化ワクチン	病原体を不活化したもので、感染症を引き起こす危険性なく免疫獲得を狙う	<ul style="list-style-type: none"> 移植後6～12ヶ月以降 慢性GVHDの増悪がない
弱毒生ワクチン	病原体を弱毒化したもので、接種することで、免疫獲得を狙う	<ul style="list-style-type: none"> 移植後2年以降 慢性GVHDを認めない 免疫抑制剤の投与がない その他、輸血やガンマグロブリン製剤等の最終投与との間隔に関する規定あり

【接種後の注意事項】

- 副作用として、発熱や針を刺した部分の発赤・腫脹・しこりなどがあります。一般的に発赤・腫脹は3～4日で消失しますが、小さなしこりが1か月程度残る場合があります。
- 稀に、アナフィラキシー（重いアレルギー反応）、けいれん、急性散在性脳脊髄炎、ギラン・バレー症候群など予期せぬ重篤な副作用が出る場合があります。
- 弱毒生ワクチンでは、非常に稀ですが、予防接種自体による感染症を起こす可能性があります。
- 予防接種をしても抗体が期待通りできず、感染症に罹患する場合があります。
- 接種当日の入浴は差し支えありませんが、注射部位をこすらないで下さい。
- 接種当日の激しい運動や大量の飲酒は避けましょう。

ご不明な点はLTFU外来担当者までお尋ねください
2024年9月改訂版



接種スケジュールと費用

あくまでも参考です。詳細は各病院へ問い合わせください。

【接種スケジュールの一例】

ワクチンの種類		接種回数	移植後接種時期						
			1年から※1				2年から		
			初回	2ヶ月後	4ヶ月後	10ヶ月後	初回	1ヶ月後	
不活化ワクチン・トキソイド	肺炎球菌	PCV13 (プレベナー-13®)	3	●	●	●			
		PCV15 (バクニューバンス®)							
		※13価もしくは15価のいずれか							
	PPSV23 (ニューモバックス®)	1			●				
	インフルエンザ菌b型 (アクトヒブ®)※2	3	●	●	●				
	ジフテリア、百日咳、破傷風、不活化ポリオ (DPT-IPV)※2	3	●	●	●				
15歳未満	(テトラビック®、クアトロバック®他)								
	15歳以上	(トリビック®+イモバックスポリオ®)							
	B型肝炎	3	初回、1か月後、初回から20-24週後						
	インフルエンザ	毎シーズン1回 (13歳未満または移植後初回は2回接種が望ましい)							
生ワクチン	MR (ミールビック®、乾燥弱毒生麻疹風しん混合ワクチン®他)		2					●	●
	水痘 (乾燥弱毒生水痘ワクチン®)		2					●	●
	おたふくかぜ (乾燥弱毒生おたふくかぜワクチン®他)		2					●	●

※1. 不活化ワクチンは以下の条件を満たす場合、感染流行状況によっては移植後3か月（種別により6か月以降）に繰り上げて早期接種を考慮可能

<抗腫瘍薬投与中でない、抗CD20抗体の最終投与から6か月以上経過、中等度以上のGVHDがない>

※2. アクトヒブとDPT-IPVに代わって5種混合 (DPT-IPV-Hib) のみの接種も可

- 移植後患者さんにおけるBCGワクチン、生ポリオワクチン、ロタウイルスワクチンの接種は推奨されていません。
- 移植を受けた施設では予防接種をできない場合には、他クリニックに接種を依頼することがありますが、「移植患者手帳」や必要に応じて医師からの紹介状も活用しましょう。

【ワクチンの費用】

- 予防接種の費用は全て自費になります
- 全てのワクチンを接種すると約10万円程度の費用がかかります。費用の詳細は、接種する施設にご確認下さい。
- 一部のワクチンは、年齢や居住地域によって助成の対象となる場合があります。

